

水の文化 都市の

農業



編集部「都市農業の現在」
甲斐良治「都市的農業の時代」
牧野征一郎「新鮮・高品質が拓く東京野菜の未来」
内田雄二「江戸東京野菜でまち興し」
鈴木英次郎「家族で六次産業化」
小泉 勝「命のバトンを練馬でつなぐ」
古在豊樹「植物工場の可能性 ハイテク技術の農的活用」
飯田 洋「都市と里山・里海をつなぐ千葉自然学校」
水落重喜「共同経営でかなえた儲かる農家モデルと循環システム」
古賀邦雄「水の文化書誌 児童文学にみる農業用水開削の偉業」
沖 大幹「わたしの里川 ― 里川幻想揺籃」
坂本貴啓「Go! Go! 109水系 145のしずくがつくる旭川」



都市の農業

農業生産の現場から離れた場所にいると、野菜などの農産物が

どんな場所で作られているように思っていますか。無頓着になっているように思っています。

畑の脇に立てられた「生産緑地」の看板や農産物販売所が気にかかるようになって、どんな人がどんなものをつくっているのたろつかと、興味が湧いてきました。

東京でも、西側にはまだまだ畑がたくさんあります。

農地で生産を続けることで、

水源涵養や緑地の保全、生態の多様性を

守ってくれるのも

都市農業の副次的な役割です。

一方、植物工場や

法人化、六次産業化によって

効率的な農業経営が求められ、

都市農業の将来は

新しいステージに向かうようにも思えます。

大規模生産地とは違う、

都市ならではの農業の有り様を知るために

農業生産の現場を巡ってみました。



■水の文化47号予告

特集「橋」(仮)

さまざまな場所に架けられた橋は、橋渡しと
いうように何かと何かをつなぐ役割を果たし
ています。何を つないでいるのか、なぜ つな
いでいるのかを探っていきます。



水の文化 Information

『水の文化』に関する情報をお寄せください

本誌『水の文化』では、今後も引き続き「人と水とのかかわり」に焦点を当てた活動や調査・研究などを紹介していきます。ユニークな水の文化楽習活動や、「水の文化」にかかわる地域に根差した調査や研究などの情報がありましたら、自薦・他薦を問いませんので、事務局まで情報をお寄せください。

ホームページのお問い合わせ欄をご利用ください

<http://www.mizu.gr.jp/>

水の文化 バックナンバーをホームページで

本誌はホームページにてバックナンバーを提供しています。すべてダウンロードできますので、いろいろな活動にご活用ください。

里川文化塾レポート詳細版は、ホームページで

里川文化塾のレポート詳細版は、参加できなかった方も楽しめる内容です。今年度の企画についても、詳細は順次ホームページでご案内します。ご注目ください。

編集後記

◆ 都市農業の定義からスタートした企画でした。取材を続けるうちに、そこで現実と向き合い知恵と熱意で前向きに取り組んでいる人たちに出会い、都市農業の可能性を感じるようになりました。美味しい食物をいただけることに感謝しながら、エールを送りたいと思います。(後)

◆ 都市農業は新鮮な農産物の供給、地域のコミュニティの可能性、災害時の避難場所など、様々な機能と可能性を持っている。市民農園や農家レストランなどは人気を博しているが、多くは事業の継続性からは危うい一面もある。生産・加工・流通と、小規模同士の連携・分担などを模索して、事業規模、組織体制などを拡充して生き残ってもらいたい。(新)

◆ 小さい頃は家の周りの山をよく走り回った。そこには家庭菜園より広い個人の畑がたくさんあった。そのうちの我が家の畑で収穫した野菜を食べた。今は畑との距離が遠くなってしまった。でも今もその山は開発されずそのまま残っている。どうなっているのか見に行きたくなった。(ゆ)

◆ 「細々と」という先入観を抱いていた「都市の農業」が、こんなにも工夫と情熱に溢れたものだとかわかった。母校の小学校では、毎年近隣農家の協力を得て、児童にサツマイモ作りをさせていたのだが、あれは今も続いているのだろうか。(原)

◆ 1つの品目で利益をあげるのではなく、ロングテールの要素を都市農業にみた。同じものならなるべく安いものを買う母親も、直売所の珍しいものにはお財布の紐もゆるむ。多種多様な小規模生産の集合体には、そんな魅力の付加価値があるのかもしれない。(力)

◆ 区民農園が人気です。リタイア世代の方が実に楽しそうに土をいじり、子供を連れただけで種蒔き方を教えたり、収穫を分けてあげたりしています。地域の緩やかなコミュニケーションの場である事も、都市の農地の大事な役割だと思います。(麻)

◆ 農文協の甲斐良治さんから「農地の評価は時代背景によって左右されてきた」と教えられた。世の中には不易流行、変わるべきものと変わらざるべきものがある。見極めは非常に難しいが、何年経っても古びないものを見方を心掛けたものだ。(賀)

発行日 2014年(平成26)2月

企画協力 沖大幹 東京大学生産技術研究所教授

古賀邦雄 水・河川・湖沼関係文献研究会

島谷幸宏 九州大学工学研究院教授

陣内秀信 法政大学教授

鳥越皓之 早稲田大学教授

客員主幹研究員 中庭光彦 多摩大学准教授

制作 後藤喜晃 新美敏之 松本裕佳 小林夕夏 原田朱野

編集製作 賀川一枝 編集長 小野田麻里 中野公力 賀川督明 撮影・デザイン

発行 ミツカン水の文化センター
〒104-0033 東京都中央区新川1-22-15 茅場町中塾ビル4F
株式会社ミツカングループ本社
Tel. 03 (3555) 2607 Fax. 03 (3297) 8578

お問い合わせ ミツカン水の文化センター 事務局
〒104-0043 東京都中央区湊3-4-10 レジディア10F
Tel. 03 (3552) 7504 Fax. 03 (3552) 7506

ミツカン水の文化センター機関誌

水の文化

第46号

ホームページアドレス
<http://www.mizu.gr.jp/>

※ 禁無断転載複写



ミツカン水の文化センター

表紙上：EM農法で土づくりに力を入れている、東京・立川市の鈴木農園の直売所。〈天然酵母パンとカフェ ゼルコバ〉を始めてから、直売所も口コミで大人気に。次々と栽培にチャレンジしている品種の選定は、長男の富善さんが担当している。

表紙下：都市圏シニアの情熱が農業に向かっている。栽培自体の楽しさもあるが、仲間と一緒に汗を流すことも魅力の一つ。

裏表紙上：住宅に隣接している都市農地。農業への関心と理解は、おいしい野菜を食べ、つくっている人と顔見知りになることで、育まれるのではないか。

裏表紙下右：農地に制約されない農産物栽培を開拓した植物工場。人工光の波長の調整も、開発にとって重要な要素だ。

裏表紙下左：江戸東京野菜栽培の達人、東京・小金井市の井上誠一さん。栽培にはハウスを活用し、江戸東京野菜の繊細な性質に対応している。

